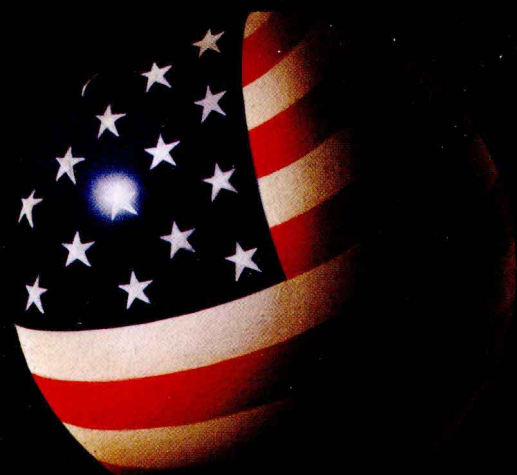


Catch Me : Kill Me

亡命詩人、雨に消ゆ

ウィリアム・H・ハラハン

村上博基訳



亡命詩人、雨に消ゆ

ウィリアム・H・ハラハン
村上博基訳



Hayakawa Novels

CATCH ME : KILL ME

William H. Hallahan
Copyright © 1977
William H. Hallahan
Published 1980 in Japan
Yakawa Publishing, Inc.
This book is published in Japan
in agreement with
Morris Agency, Inc.,
Tuttle-Mori Agency Inc.,

検 印
廃 止

亡命詩人、雨に消ゆ

昭和55年3月15日 初版発行

著 者 W・H・ハラハン

訳 者 村 上 博 基

発行者 早 川 清

発行所 株式会社 早川書房

東京都千代田区神田多町2-2

電話 東京(254)1551(代)

振替 東京・6-47799

印刷 信毎書籍印刷株式会社

製本 大口製本印刷株式会社

定価 1200円

0097-902910-6942

亡命詩人、
雨に消ゆ

日本語版翻訳権独占
早 川 書 房

© 1980 Hayakawa Publishing, Inc.

Ⅰ
リ
ア
リ
イ

ボリス・コトリコフの姿を同僚たちが最後に見たのは、午前十一時十分だった。

彼は東四十三丁目のオフィスを出て、横なぐりの雨に黒い傘をさし、駅へ向かった。左手にはアタッシュ・ケースと、茶の書類封筒を持っていた。

四十三丁目とレキシントン・アヴェニューの交差点へきたときには、もうズボンにはひざまでぐしょぬれで、華奢な傘はいまにもひんまがりそうだった。交差点を足ばやに、いつか文芸批評家に「堂々とうねり進むキリンのよう」といわれた歩きかたで、ひよいひよいと軽やかに横断した。グランド・セントラル・ステーションへくると、コンコースを待合室へ進んだ。四面体の時計をちらと見あげ、洗面所へ行った。十一時二十三分。

洗面所でボリス・コトリコフは、アタッシュ・ケースを洗面台の下におき、朝顔に向かった。彼が背を向けた入口から、大柄な、のっぺりした顔立ちの男がはいってきて、タイル壁にもたれて彼をながめた。手を洗っていた初老の男が出て行った。クロゼットからもひとり、騒々しく出てきて、蛇口の下で指先をぬらし、ばっばつとふって出て行った。

コトリコフと、壁にもたれた男だけになった。とつぜん、べつの男が四人はいってきて、一丸となってコトリコフの背後に迫った。ひとり、ほとんど無造作に、コトリコフのやせたからだをうしろから抱き締め、同時にもうひとりが、コトリコフの口を手でふさいだ。さらにべつの手がつぎつぎにきて、両腕をとらえ、ぬれたレインコートのボタンをはずし、右の袖を抜いた。レインハットがぬれたタイルにころがりおちた。傘が倒れ、泥足で踏みつけられた。レインコートのすそがひきずった。シャツの袖口から白いボタンがはじけて床におち、袖が乱暴にまくりあげられた。彼は床にねかされた。頭と首と背中の上は、ひとりの男のひざにがつちりおさえこまれ、唇とあごをおおっているやわらかい部厚い掌に、なおも力がくわわった。両足はほかの手でおさえられて、まげることできない。二の腕

までむきだしにされた右腕は、べつの男のひざの上にのせられた。二本の手が、黄色いゴム管をひじの上にすばやく手ぎわよく巻いて、貧弱な二頭筋と三頭筋を締めた。きつく締めた。鎖骨下静脈につながる太い尺側皮静脈がふくれた。

静止した光景になった。ものの数秒でコトリコフをつかまえて右腕をむきだした四人の男は、いまはひとかたまりになつてうずくまり、彼をぬれた床にしかとおさえこんでいた。身うごきならぬよう、主関節はすべておさええてあった。すべてはまったく無言のうちになされた。だれもひとこともしゃべっていない。全員が目が腕関節部分、ふくれた静脈にそそがれている。

五人目の男が、透明のプラスチック・ケースをあけて、皮下注射器をとりだした。男は注射筒をちよつと見てから、コトリコフのそばにしゃがんだ。外でだれかがドアをたたきはじめた。すべての目が、針が下へおりのをみつめた。鋼鉄の針先が静脈にふれるのを感じると、コトリコフは激しく息を吸いこんだ。口にかぶさった厚い掌の下から叫ぼうとした。四人の男は、もがくからだをおさえた手に、さらに力をこめた。

コトリコフは針が静脈にはいるのを感じ、目でも見た。

こぶしでドアをたたく音は、執拗につづいた。どん、どん、どん。

全員の見守るなかで、男の親指がブランジャーを押し、透明な液体をコトリコフの静脈にそそぎこんだ。二十cc。十五cc。十cc。五cc。おわった。

男は慣れた手つきで針を抜いた。立ちあがり、ほかの者にうなずく。ドアの音が、男を入口の見張りのほうへふり向かせた。

四人はコトリコフから手をはなし、立ちあがつて見おろした。ひとりがゴム管をはずした。コトリコフは息をあえがせて上体を起こすと、血を流している腕の穴をみつめた。びっくりした目で彼は四人の男をながめ、それから注射器の男を見やった。

「立て」リーダーはいった。ロシア語だった。

コトリコフはじわじわつのる恐怖にかられながら立った。彼は両のこぶしをあげてふった。「これはなんのまねだ。わたしの腕になにを注射したんだ」

「大きな声を出すな」リーダーは注射器をプラスチック・ケースにもどし、レインコートのポケットにしまった。腕時計を見て、それからコトリコフの瞳孔をじつとのぞきこんだ。

「大きな声を出すなだ」と？ 声を出すなだ」と？」コトリコフはこぶしをふった。全身がふるえた。ふと、彼は自分がのびあがっているのを感じた、背が高くなっているのだ。周囲の壁がゴムの膜のようにのび、眼前の六つの顔が、ふわふわだよいながら大きくなり、自分のからだは足から上がぐんぐんのびて、まるでエレベーターであがって行く感じだった。

△「ボリス、本をおいて食べなさい」母の声がした。大草^{ステツ}原のなかの広いまばゆい麦畑が、一挙に無限にひろがった。「ロシアの法律では」と、父がいった。「十八歳以下の子にタルムードをおしえることは禁じられている」

ボリス・コトリコフの四肢が、ちりちりと疼いた。薬物が心室、心部大動脈を通じて、脳の大小血管に満ちわたったのだ。聴覚が鋭敏になった。あごがこわばる。しだいにからだの自由が失われていくのがわかる。頭のなかをかすめるさまざまなイメージに、彼は居竦^{いすく}められていた。へ発狂するとこんなになるんだろう

グランド・セントラル・ステーションの男子洗面所には、いつて一分たらず、ボリス・コトリコフは口元をこわばらせ、両腕を硬直させ、壁にひたと目をすえて、フロアの中央に立っていた。からだはうごかず、思考はとりとめがな

く、脳髄は二十ccのなにやらえたいの知れぬ薬物に金縛りになっていてた。

「ゲルブ、はやく」洗面所の係員はせかした。「はやくきてくれ」

パトロール警官ゲルブはいそいだ。係員につづいてエスカレーターをおりながら、レインコートの前をあけた。上着のスリットをひらいてホルスターを出し、細い安全止革をはずした。他方の手は警棒をひき抜いた。拳銃と警棒で武装して、彼は係員のあとから待合室を突っ走った。

洗面所に近づくと、男が六人、まんなかに長身のやせた男をかかえるようにして出てきた。

「どうしたんだ」ゲルブは大声でいった。「ドアをふさいでなにをやったんだ」

「なんでもない」

「なんでもないことがあるか。それに、きみにきいてない。こちらにきいてる」

「そちらも連れだ」

「きみにきいてない！ おい、あんた、口がきけんのか。」

ドアをふさいでなにをやったんだ」

「仲間が気分が悪くなったんだ。それで吐くといけないか

ら、この男がほかの人を入れないようにしていたんだ」

ゲルブは男に向かって警棒をふりうごかした。「もういちどだけきく——その入口をふさいで、なにをやってたんだ」

「その人がいったとおりだ。連れがフロアに吐くといけな
いから、人を入れないようにしていた」

ゲルブの目が、男たちの顔をねめまわした。外国人だ。

どこの訛りだろう。ロシアか、ポーランド——彼の祖父の訛りとそっくりだ。ひとりが泥だらけの傘と、大きな書類封筒を持っている。「どの人だ、気分が悪いのは」

「こちらだ」

ゲルブはじつと見た。やせた男の目はすわって、なにもわからぬもののように、とろんとみつめていた。くいしばった歯の隙から速い息をして、その呼吸のテンポに合わせ、頭が上下に小さくうごいている。口の端に泡がたまり、いまにも吐きそうに見えた。

「どうしたんだね」

「昼食時に過ごしたんだよ。ぐびぐびやりすぎた」

「ぐびぐび？」

「アルコールだよ。飲みすぎだ。さあもう、おまわりさん、こっちはなにも不都合なことをしたわけじゃないんだ。連

れが気分が悪くなったから、家へ送ろうというんだ。大丈夫、なんでもない。それよりタクシーをつかまえるの手つだってもらいたい」

ゲルブは相手の指が、制服のサイド・ベンツになにかつかむのを感じた。彼は不審げに男の顔を見、それから係員を見やった。「なかは異常ないか」

係員は肩をゆすって、「ないよ。盗むものがあるわけじゃない」

ゲルブはもういちど気分の悪い男を見た。瞳孔があきらかに拡張して、酔ったというよりは異様な印象をあたえている。「タクシーまで行けるかね。歩けるかね。吐きそうなか」彼はじつとすわった目をみつめながら、返事を待った。べつの男が、気分の悪い男の腕をつついた。「うなずけばいいんだ。うなずけ！」

コトリコフはゆっくりうなずいた。

「ほら。大丈夫だ。ひと眠りすればなおる」

「きみはこの人たちといっしょに行きたいのか。え？ どうなんだ」

コトリコフはおそろおそろのように片手をさしたした。

のろい動作だった。指が警官の手首をつかんだ。ゲルブはその指のふつくらしたぬくもりを感じた。男の目が、警察

官制服の胸のネーム・プレートに向かって、大きく剝^はかれた——狂おしげに、近視眼のように。

「ゲルブだ」警官はいつて、レインコートの前をもつとはだけた。「ハリー・ゲルブと書いてある」

相手の口が、なにかいおうとして、空気をのみこんだ。

ゲルブはまた男の目をのぞいた。「この人になにをのませたんだ」

「のませた？ 自分で飲んだんだ。酒の飲みすぎだよ。彼、いまつらいんだ。身内に不幸があつてね。さあ、もう連れて帰って寝かさなきゃ。その辺に吐き散らされちゃ困るだろう」

ゲルブは迷つたが、肩をすくめていった。「タクシーなら、エスカレーターをあがつたところにくらもいる」

足元おぼつかぬ、気分の悪い男をせき立てて、男たちはそそくさとはなれて行つた。男のレインコートの背中が、泥水でよごれていた。

ゲルブは拳銃と警棒をおさめて見送つた。やせた男の歩きかたはぎくしゃくして、千鳥足というよりどこか不自然で、ゲルブは徐々に男たちをのみこむ人込みの隙から、肩をしかめてながめた。

「いいんだ」と、彼は野次馬にいった。「なんでもないん

だ」五、六歩進んで立ちどまり、それからためらいがちに、ぞろぞろかたまり歩く人に混じつてエスカレーターへ行くと、上着のサイド・ベンツに指を入れて賄賂をひっぱりだした。十ドル札が一枚。地上に出ると、男たちが二台のタクシーに分乗し、土砂降りのなかを走り去るところだった。ゲルブは肩をすくめ、またエスカレーターで下へおりた。「おい、ゲルブ！」係員がアタッシェ・ケースをさげて走ってきた。

ゲルブはうけとつて、「あの連中のか」
「うん、酔つた男のだ。あの男がさげてた」

ゲルブは大理石張りの出札カウンターへ持つて行つて、台の上にたいらにおき、左右の掛け金をばちんとひらいた。いちばん上に本が三冊と、タイプで打つた原稿があつた。隅に小さな薬びん、皮下注射器、オレンジが一個、バキプシー行きの切符、手帳、速記ノートがあつた。いちばん下には、透明のプラスチック・ケースにはいったカードがみつかつた——合衆国司法省移民帰化局発行の外国人登録証。カードには酔つた男の写真がはつてあつた。氏名——ボリス・コトリコフ。身分——暫定移住者。登録ナンバー——一八七〇七四九三。

パトロール員ゲルブはケースのポケットに手を入れて、

黒い小さな布をとりだした。

「スカルキャップだね」

「ヤーマルケだ」

「え？」

「ヤーマルケ。ユダヤ教会でかぶる帽子だ」

「そうさ、それをいうのさ。ユダヤ人のスカルキャップだよ」

「これは報告したほうがいいな。もしかすると誘拐かもしれない」

「だとすると、ゲルプ、あんたはただじゃすまんぜ。あの男が連れて行かれるのをとめなかったんだからな」

「やかましい」ゲルプはボリス・コトリコフの指につかまれた手首をさわって、考えこむ顔つきになった。

東部標準時一三・一七、ワシントンDCの各種政府機関のテレタイプが、とつぜんとまった。すぐつづいて、シグナル・ベルが鳴りだした。

受信者のなかに、司法省移民帰化局の一セクションがあった。

へ急報あり待機せよ。待機せよ。

ニューヨーク市フォリー・スクウェアFBI支局は東

部標準時間一一・二七グラント・セントラル・ステーションで発生した誘拐事件と思われる事件の報告を市警本部よりうけ目下調査中。被害者は亡命ソ連詩人で現在わが国に暫定移住者の資格で在住のボリス・コトリコフと一応断定されている。支局はすでに捜査員を派遣した。詳細は入手しだい連絡する。ニューヨーク市東部標準時一三・一五

FBIの捜査官は、東部時間一三・三一、激しい雨のなかを分署に到着した。六段の玄関階段をあがり、両脇に緑燈のついた入口から分署のビルにはいった。なかにはロープが張られ、それに札がさがっていた。

ここで身分を証し
用件をつけて下さい

受付の警部補は、机で逮捕簿に記入しているところだった。捜査官が身分証明書をしめすと、警部補はうなずいて、鉛筆で署員控室をさした。「そちらにいますよ」

捜査官は控室の入口で立ちどまり、シャツ姿でテーブルについているパトロール員を見やった。コーヒー・マグをかたわらに、報告書をこしらえている。その背後では、雨

が窓ガラスを洗っていた。壁には管内の各巡回区域の勤務割当表が、タイブ書きではりだしてある。その上には、犯罪者とギャンプラーの顔写真がならんでいる。

「ゲルブ君か」

「そうです」

「アタッシュ・ケースは？」

ゲルブは足元に手をのばし、ケースをテーブルの上に出した。

捜査官はそれをねかせて、掛け金はずした。本、資料、注射器、薬びん、原稿を見た。オレンジを外に出し、ヤーマルケ、電車の切符を手にとってながめ、外国人登録証を調べた。「これだけかね、身許を証すものは」

「わたしがあげたとき、はいつてたものはそれだけです」

「これだけ？ ほかにカード類は？ 紙入れは？ 法律では、このカードは常時身につけていなくてはならんのだ——紙入れにでも入れて。このケースをあげたとき、紙入れはなかったのかね」

ゲルブは連邦捜査官にいやな顔をしてみせ、コーヒーをひと口やった。

連邦捜査官はアタッシュ・ケースをばたんととして、腰をおろした。

「よし、それじゃ話してもらおうか——いちばん最初から」

一三・三五、ふたりのFBI捜査官は、ビル管理人の案内でコトリコフのアパートの部屋にはいった。

「ね？ いったでしょう、だれもないって」

「もういちどみんなの居所をきいところか」

「奥さんと子どもはパキブシーの実家で、旦那は会社です」

捜査官のひとり、室内を歩きまわった。もうひとり、電話ののっている机の引き出しをあげた。なかから小さなアドレス・ブックをとりだした。「パキブシーの実家の名前は？」

「さあ、そいつはちょっと骨だな。なんていったかなあ」

捜査官はアルファベット順の名前にざっと目を走らせて、「コースンか。そうだろう」

「そうそう。コースンだ」

「ミッドウェイ・アヴェニュー二二七」

「だろうね。知らないけど」

捜査官は自分のオフィスに電話して、ファウラーをよんでくれといった。「自宅です。だれもいません。管理人の

話では、細君は子どもを連れてバキブシーの実家へ行っているそうです。住所はバキブシー市ミッドウエイ・アヴェニュー二二七、マニー・コースン。電話は——と、番号を読みあげ、それから管理人のほうを見やって、「コトリコフ氏は糖尿病かね。え？　糖尿？　管理人の話では、コトリコフは糖尿病です。ええ。どこ？　ちょっと待って」彼は紙片になにか書きとめた。「ブルックリン？　わかりました」

捜査官は電話を切り、相棒に紙片を渡した。「会社だ。何時に会社を出たのか、どこへ向かったのか調べてくれ。おれはブルックリンの戸籍課へ行く」

東部時間一三・五五、捜査官は共同公用車でブルックリン・ブリッジを渡った。フラットブッシュ・アヴェニュー別館の戸籍課に車を止め、〈婚姻〉の部屋へ行つて台帳を調べた。数分かつた。

「電話を拝借したい」彼は係の女性にいった。

「公用にかぎります」

身分証明書を見せてダイヤルした。ファウラーにつないでもらう。「台帳から読みあげます。ボリス・コトリコフとエイミー・コースン。彼女は合衆国市民です。結婚許可

証はキングズ・カウンティから出ています——そう、ブルックリンですね。一昨年の十月十四日。届出人はラビ・オスカー・ライバーマン。場所はブルックリン。同年十月十七日です」

リアリイがいちばんはやく到着した。

二時半ちょっとすぎ、彼は司法次官室と廊下をはさんで向かい合う、七階の会議室にはいった。ぬれたレインコートを脱ぎ、たたんでサイド・テーブルにおいたとき、ふと、煙草の煙のしみついた、会議室のなじみのおいに気づいた。

ぬれたアタッシュ・ケースを椅子の横においてすわると、眼鏡をはずしてティッシュ・ペーパーで拭いた。この窓のない部屋の装飾は、彼の目にもすっかり見慣れたものだった。調度品のほとんどは、ウッドロウ・ウィルソンの大統領就任以前にしつらえられ、かわらぬ舞台装置のように、第一次大戦以来のすべての国際危機をくぐり、三世代の悪夢をながめてきた。一九二九年の恐慌、不況、ヒットラーの台頭、満州、パーネイ号事件、ルール再占領、ポーランド侵略、日本の東南アジア征服、日本の最後通牒、真珠湾、第二次大戦、戦犯裁判、イスラエル、朝鮮、ベルリン、キ

ユーバ、ヴェトナム。おそらくワシントンのどこにも、世に出た回顧録中に、この会議室はど数多く登場している会議室はないだろう。ここには歴史をつくるのに加担したあらゆる著名人物が、煙草の煙のにおいと、二十世紀から切りはなせなくなったにおい、すなわち腋の下の體えた不安のにおいのなかに、ずっとかくれて居のこっているのだ。

この部屋を「きちがい帽子屋のティー・ルーム」とは、いいえて妙だった。

リアリイはアタッシェ・ケースから、コトリコフ関係書類と、クロスワード・パズル・マガジンを取り出した。彼はやりかけのページをひらいて、パズルのつづきにとりかかった。

まもなくパウエルはいってきただ。リアリイにうなずくと、ぬれたレインコートをひきむしるように脱いですわった。「お空が^{ザ・スカイ・イズ・フライング}おちてくる。お空が^{ザ・スカイ・イズ・フライング}おちてくる」彼はつぶやいてから、小さなふるえる口笛をひとつ洩らし、テーブルの上にあったペーパー・クリップを所在なげにのぼした。ふたりは黙りこくって待った。

CIAの側近を左右にしたがえて、ガス・ゲラーが騒々しくしゃべりながらはいってきた。側近は書類ホルダーをかかえ、まじめくさった顔で上役のおしゃべりをきいてい

た。ゲラーは大きな赤いボウ・タイにちょっと手をやり、カメが甲羅から首をのぼすように、太ったあごをつきだした。やわらかいゴムのような葉巻き愛好者の口と、葬儀屋のような値踏みする目を持っている。

「これはこれは」と、パウエルがいった。「FBIの大ファンのお越しだ」

「よしてくれ」ゲラーは手をふった。「冗談はいかんぞ、パウエル、冗談は。こいつは笑いごとじゃないんだ」パウエルに渋面を向けたまま着席し、側近が両どなりにおさまった。

パウエルは笑みをうかべて、「こっちも冗談のつもりはないがね」

「そうかい」ゲラーは葉巻きを出して、リアリイの顔を見た。セロファンをはがす手がふるえ、彼は小さなげっづを洩らした。「そっちも外国人登録課か」

「そうじゃない」と、リアリイはこたえた。彼はゲラーのワイシャツの胸に、スバゲティ・ソースのしみがひと筋ついているのに気づいた。赤いボウ・タイが血を流したみただった。

「ほう」と、ゲラー。「じゃ、きこう。あんたはこの人だ」

「わたしはリアリイ。ペン・リアリイ。移民局の者だ。まだきみの名前をきいてない」

「そう。まだきかせてない」

さらに六人、一団になって、急ぎこんだ小声でしゃべりながら、ためらいがちにやってきた。すわった男たちのあいだに視線を走らせながら、彼らは会議テーブルへきて思い思いの席につき、同席者のほうに小さくうなずいた。

「何事だ。なんのための召集だ」

廊下の向かい側の部屋から、スチュアート・ホールシイ国務次官が、威勢よく会議室にはいつてきた。あとに男が四人したがった。次官はまっすぐ上席へ行って、椅子をひきだした。「チャーリー、そこをしめてくれ」いつて彼は席についた。「さてと。だれからはじめてもらうかな」リアリイのほうを見やり、「ニューヨークの報告からはじめてもらおうか、リアリイ君。諸君、ほかの人については省くが、リアリイ、パウエル両君だけ紹介しておこう。ふたりとも司法省からきてもらっている。リアリイ君は移民帰化局の法律顧問、パウエル君は外国人登録課の特別調査官だ。いまから両君がつけることは、諸君の一日をだいなしにするだろう。ではリアリイ君、報告を」

リアリイはアタッシェ・ケースをテーブルにおいてひら

いた。ただちにテレックス報告を読みはじめた。「本日、東部標準時一一・二六、五、六名の男——正確な人数も身許もいまのところ不明——が、ニューヨーク市グランド・セントラル・ステーションの男子洗面所にはいった。男たちは入口ドアをとざし、人がはいれぬようにした。数分後、彼らはあきらかにぐあいの悪いひとりの男を連れて出てきた。男は見当識を失っているらしく、からだのうごきも連携の欠如をしめた。洗面所の係員は、ニューヨーク市警のバトロール警官をよんだ。職質をうけた男たちは、ぐあいの悪い男は飲みすぎで、はやく寝かせる必要があるとこたえた。彼らは男を連れ去った。その男がボリス・コトリコフ、すなわち多年ソ連で一流詩人の地位を占め、二年前ユーゴスラヴィア訪問のさい合衆国に亡命した人物であることが、かなりの確実性をもって信じられている。くわしい特徴描写からすると、彼は酔っていたのでなく、薬物をあたえられていたと医学的にも考えられる。コトリコフは糖尿病で、アルコール類は飲めない。コトリコフ所有のアタッシェ・ケースが、いまいった出来事の直後、洗面所内で発見された」

リアリイは一同を見まわした。「以上が、これまでに判明している事実です。ひきつづきFBIが捜査にあたつて